

■ ウェーバー／歌劇「オベロン」序曲

歌劇「オベロン」は初期ロマン派を代表するドイツの作曲家、カール・マリア・フォン・ウェーバー(1786-1826)が書いた最後のオペラである。「魔弾の射手」の成功により、ロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスの支配人から委嘱を受けて作曲。1826年4月12日に初演され、大成功を収めたと伝えられる。だが、現在ではそれほどの人気を獲得してはいない。

その原因の一つはやや複雑な台本にあると言われる。『ファウスト』か『オベロン』に基づくオペラという条件があって、ウェーバーは中世フランスのロマンスに基づいたドイツ人ヴィーラントの詩「オベロン」の英訳を原作に選んだ。妖精の国の王様オベロンが王妃のタイタニアと口論になり、いかなる困難や誘惑にも負けず、愛を貫く男女を見るまでは和解しないと誓う。妖精パックに相談をもちかけた王様は、シャルマーニュ王につかえる若い騎士ヒュオンを候補に選び、バグダットの大使の娘レチアと相思相愛となる魔法をかけ、愛し合う二人の行方を見守る。

オペラの劇中で奏でられる重要な旋律を組み合わせて作られた序曲は、冒頭で妖精たちの集う不思議な森へと誘い込む。ゆったりとした序奏はオベロンの「魔法の角笛」を象徴するホルンの楽想と弱音器を付けたヴァイオリンの応答で始まる。木管楽器のすばやい動きをきくと、妖精が飛び回る様子が目に浮かぶようだ。そのあと行進曲風の力強い楽想が続く。「火のようなアレグロ」と記された主部はソナタ形式。ここから人間の世界へと転換する。オペラの四重奏を弦楽器で奏でる第1主題も、クラリネットが吹く第2主題第1節も、ヴァイオリンが奏でる第2主題第2節も、歌劇の中のアリアに基づいていて、若い2人の強い愛情が表現される。第1主題による展開部で激しい嵐などの様子を描きながら、変則的な再現部となり、高揚して終わる。

白石美雪

※※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記